

北海道 CLASS プロジェクト事業 第2回帯広三条高校探究コンソーシアム会議 (要旨)

日時：令和6年3月15日(金) 16:00～17:00

会場：北海道帯広三条高等学校会議室(メイン会場) ZOOM会議

○(参加者)

北海道十勝総合振興局地域創生部地域政策課(課長)
帯広市都市環境部都市建築室都市政策課(課長)
北海道教育大学教育学部釧路校(准教授)
北海道医療大学(非常勤講師)
帯広畜産大学農業経済学系(准教授)
独立行政法人国際協力機構北海道センター(帯広)(副代表)
十勝毎日新聞社(社長室室員)
一般社団法人とかち子育て支援センター(代表理事)
地域コーディネーター
北海道本別高等学校(教頭)

範岡	国田	修史	様	【欠席】
宮前	耕史	様		
長谷川	聡	様		
窪田	さと子	様		
谷口	光太郎	様	【欠席】	
岡田	優人	様		
長岡	行子	様	【欠席】	
小	林	央	様	

○(運営者)

北海道帯広三条高等学校(校長)
北海道教育庁十勝教育局教育支援課社会教育指導班(主査)

合浦 英則
田尾 祐祐

1 開会式

●(校長挨拶) 北海道帯広三条高等学校長 合浦 英則

みなさん、こんにちは。お忙しい中お集まりいただきありがとうございます。2回目のコンソーシアム会議を開催いたします。CLASSプロジェクトは本年度で終了しますが、本校の探究活動は継続していきますので次年度もご協力をよろしくお願いいたします。今回は、3年間を振り返って、どのように本校が変容していったのかについてお話しさせていただく予定です。どうぞよろしくお願いいたします。

2 説明

●北海道帯広三条高等学校長 合浦 英則

本校の最終的な目標は、都市型探究プログラムの構築です。探究活動は全国的に展開されていますが、本校のように規模の大きな学校が、都市型の探究プログラムをどのように構築できるのかについて模索してきました。1年次は思考ツールの習得と地域課題をテーマにした探究活動を、2年次は進路別類型による探究活動を、そして3年次は個別の探究活動を進めて行くことを考えていました。これらの活動を支えるのが探究コンソーシアムです。

3年間の取組を振り返ります。

事業の開始前、私の赴任1年目に、校内研修において、探究活動の推進で有名な國學院大学の田村学教授を招いて授業を見ていただきました。その際、受け身の授業がほとんどであると指摘されました。また、アウトプットが大切で、総合的な学習が学力向上の鍵だと示していただきました。それを受けて、本格的に探究活動が動き出しました。1年目は、外部人材を活用した探究的な学びを展開しました。3年次選択授業の「自己表現」や2年次の「総合的な探究の時間」、2年次の「現代社会」においても、企業・団体を招いて地域貢献について講話していただきました。コンソーシアム会議を設置し、年2回会議を開催し、コーディネーターの長岡さんにも協力してもらいました。校内体制としては「探究推進部」を設置し、探究活動をリードする分掌を組織しました。

2年目は、新学習指導要領の1年生から、段階的に探究プログラムを作ろうとしました。1年次は地域課題をテーマにした探究活動を行いました。各教科・科目でも、音楽の時間に十勝に伝わる子守歌を題材とするなど、外部人材を活用した授業を展開しました。また、CLASS探究交流会を実施し、本別高校、帯広工業高校と発表会を行いました。

3年目は、2年次の進路別類型による探究活動が始まりました。金曜日の1コマだけではなく、2コマ続きの授業とし、校外に出て探究活動をしやすい体制を構築しました。休日や総合探究の時間での実施が不可能な場合、学校として年1回公欠を認めることを職員会議で決めました。

実際に3年間で学校や生徒がどのように変わったのかを見ていきます。

まず、外部人材の活用数が多くなりました。令和2年度は外部人材の活用は1名でしたが、令和4年度には117名、令和5年度は令和5年11月時点で60名の外部人材の活用があります。

地域人材と協働した探究活動の具体例を見ていきます。

「自己表現」の授業においては、CLASSプロジェクト以前から帯広市の協力を得て進めています。帯広美術館との対話型鑑賞の授業は継続的に実施しています。美術品は地域の方から借用しており、毎年継続しながら内容を変えて進めています。対話型鑑賞は、生徒が自分で感じたことを言葉にする授業です。令和4年度には、1年次の総合的な探究の時間における商品開発のグループが、販売まで行うことができました。本当に多くの方々が、生徒と一緒に後援や実験に携わってくれるなど協力してくれています。また、コンソーシアムメンバーの皆様にも、様々な場面でバックアップをいただいています。長谷川先生や宮前先生には学生と生徒をつないでいただくなど協力をしてもらっています。生徒は大学生などから刺激を受けています。今年度は帯広畜産大学の窪田先生の計らいによって、本校のScience&Technologyの類型において、大学での実験を経験することができました。次年度の専門的な探究に向けて大きな刺激を受けたと

ころです。

外部とどのような活動をしてきたのかについて紹介します。

まずやパンの麦音さんとの行事は、2年続けて実施できています。また、開西病院での医療職体験、特別支援学校の見学、マテックプロダクツ見学、企業の防災の取組にも生徒が参加しています。

公欠にする外部活動は、3つの取組がありました。2年生の探究活動は、それぞれのグループで探究活動を行い、12月にポスターセッションを行いました。その中の1つのグループが、2月に行われた地学協働アワード（北海道教育委員会主催）で特別賞を受賞しました。彼らは、不登校について探究活動を進めました。実際に、不登校生徒の支援活動をしている方にインタビューをした後、団体の活動に参加したいとの申し出があったため、学校としても公欠の制度を作って学校外での活動を後押しすることにしました。生徒の感想として「実際にSmilyの活動（不登校生徒への支援活動）に参加させていただいて、不登校の生徒のイメージが180度変わりました」「教育を受ける＝学校に行くこと、になってしまいがちですが、学校以外にも教育を受ける環境はあるのだということを理解しました」「不登校生を無理矢理学校へ行かせるのではなく、どう接するかを考えるべきだと感じました」「今がつらい生徒と未来を心配する大人や第三者との価値観のズレがあり、ややこしくなってしまう」などの意見がありました。この活動に参加した生徒のほとんどは、教員を目指す生徒や教育に携わりたいと考える生徒でした。彼らが、実際に教員になったときに大きな価値を生み出すと感じています。

さらに、今年度、本校のコーディネーターの長岡さんが「十勝管内教育実践表彰」を受賞しました。長岡さんは、学校のリクエストに応じてくれるだけではなく、長岡さん自ら生徒を引っ張り、外部のボランティア活動につなげてくれるなど、探究活動の柱として活躍してくださっています。改めて、感謝申し上げます。

続いて、成果と課題についてです。

成果については、探究活動における外部人材リストが作成されています。また、生徒自身が自分の成長を感じたり、地域への関心を高めることができたりしたことがアンケートや反省から読み取ることができま

す。また、生徒の大きな変化として主体的な動きが出てきたことが挙げられます。課題として、教員のマインドセットがありますが、外部の方が入ることの抵抗感は減ってきましたし、生徒が外に出て行くことへの抵抗感も減っています。次のステップとして、外部人材の方に「来てもらう」段階から、「一緒に取り組む」段階に進むことが考えられます。

外部からは、素晴らしい探究活動だと評価していただいていますし、探究活動をきっかけにして進路目標を定める生徒も出てきています。ただし、CLASSプロジェクトが終わるとコーディネーターの予算がなくなってしまうので、次年度以降はPTAの予算を活用するなど工夫したいと考えています。

なお、CLASSプロジェクトの研究報告書は、北海道教育委員会のホームページで公開されているのでご覧いただければと思います。

最後に、次年度に向けての展望について触れます。3年次生は個人テーマで探究をする予定です。新3年次生には、どんな外に向けて試行錯誤してほしいと伝えています。どのように外部人材を活用するかについても工夫していきたいです。レポートや制作物で成果を発表してもらう予定であり、キャリア教育として在り方・生き方を考える探究活動のあり方を研究していきたいと考えています。できれば、次年度は生徒の発表の場面に合わせてコンソーシアム会議を設定し、都合が合えば発表会にも来ていただければと思っています。引き続き、生徒の活動に対してご意見、ご助言をいただければと思います。次年度で3カ年の探究プログラムの構築が完成します。3年間ありがとうございました。これからもよろしくお願いします。

③ 協議・意見交換

● 北海道十勝総合振興局地域創生部地域政策課（課長） 範国 修史 様

3年間の取組大変お疲れ様でした。今年度は、実際に2年次生のポスターセッションを見させていただきました。ハキハキと堂々と説明をしている姿に感心しました。また、内容も地域振興や国際交流に対関して高校生独自の視点があり、私自身の仕事にも役立てることができそうだと感じました。さらに、タブレットなどのICT機器の操作も生徒は慣れており、説明したいことを上手にまとめるなどしていました。工作上、地域課題に関心をもっていただくことが重要だと感じています。生徒を見ると関心が高まっていると感じますので、今後も取組を進めていただければと思っています。

● 北海道教育大学教育学部釧路校（准教授） 宮前 耕史 様

なかなか帯広に伺えず、申し訳なく思っております。一方、賞を受賞する等、ご活躍を見られて大変嬉しく思います。

今年度は、本校の学生がオンラインで三条高校の生徒と関わらせていただきました。どれほどお役に立つことができたのか分かりませんが、学生たちにとっては、自分たちの取組を言語化し、高校生に伝えるアウトプットの大変良い機会となりました。学生からも、同じような機会が再びあったら嬉しいと言われています。

着実に成果が出ている一方で、今後は、より一層外に出て行くことを考えておられるとのことでした。都市型の探究プログラムの構築を進めていると聞いています。私も驚いたのですが、東京の渋谷区の小・中学校では、学校に行くのは午前中だけで、午後は地域に出て行くカリキュラムにするそうです。

また、先生方のマインドセットに難しさを感じているとのことでしたが、学生も同じで、学校（大学）の中に閉じこもってしまう傾向があります。ご報告の中にもありましたSmileyプロジェクトのように、「学校だけが教育の場所ではない。外に出て良いのだ」と生徒のみなさんが感じることの意義は大きいと思います。学校教育だけが教育ではなく、社会教育や地域教育もまた教育の一つの側面と知ることのインパクトは大きいものがあります。生徒のみなさんが地域との関わりの中で変わっていく姿を可視化できれば、教員だけではなく、地域の方や大学の教員も含め、マインドセットが変わっていくと思います。今後ともよろしくお願いします。

● 北海道医療大学（非常勤講師）長谷川 聡 様

3年間関わらせていただき、こちらも大変勉強になりました。ありがとうございました。短い期間で成果を挙げられたことに敬意を表したいと思います。3つお伝えしたいことがあります。

まず、看護・医療の分野に対しては、先ほどの宮前先生の発言と同じことが起こっています。例えば、看護師になりたい生徒は病院で働くイメージを持つと思いますが、医療職、福祉職、介護職が働く現場は、専門施設の外にどんどん出て行き、まさに地域の中で働く時代になっています。今は、新しいタイプの介護や医療の施設ができています。例えば、教育との連携の中で、言語聴覚士の資格をもった人が教員免許をもった人と一緒に、耳が聞こえない人の学習塾を開くなどの取組が道外では見られます。これからは、教育・医療・福祉の連携や、新しい発想を持った専門職が求められている時代になっています。

次に、地域課題というときに「十勝の問題・帯広の問題」を考える1つの軸を持つとともに、もう1つ「日本の課題・世界の課題」を捉える、さらに「社会の課題」は何かという3つの軸で見る視点を持つことで、新しい時代に向かう地域人材の育成につながると思います。お手伝いできることがあれば、ぜひ協力させていただきたいと思います。

最後に、今年度はスクールカウンセラーの委嘱を北海道教育委員会から受けて関わっています。また、別の地域では、キャリアデザインプログラムの一環として、町と高校の連携プログラムに関わっています。私はワークショップパーとして行きますが、現場の先生方の負担感が多いと感じています。教科、校務に加えて、新しいプロジェクトが始まると負担が増えてしまう意識があります。これに対しては、教科に新しいプロジェクトの内容をどのように落とし込んでいくかが大切だと思います。

例えば、数学を学ぶときに、単純に数列を学ぶのではなく、それが何のために役立っているのか、しきい値や平均値が血圧に関わっているなど、現実的な課題を取り込みながら、教科の中で取り組むことが大切になってくると考えられます。十勝の地域課題というだけでなく、日本の課題、未来の課題と教科を結びつけて捉える際に、数学の力や国語の力が必要であると理解するなど、教科との関わりを持たせることができるのではないのでしょうか。

● 帯広畜産大学農業経済学系（准教授）窪田 さと子 様

3年間お疲れ様でした。正直、最初は全体像をつかむことができておらず不安もありましたが、3年間を通して成果があり、非常に嬉しく思っています。また、Science&Technologyのタイプの生徒は、大学にも来ていただきました。学生のレポートを見ると、分野と分野のつながりを感じることができたのが高校生が捉えてくれたので、来ていただいた意義があると感じています。

2点ほど、コメントさせていただきたいと思います。

1つ目は、3年次の個人テーマについてです。個人テーマは難しいイメージがあります。どこまでのレベルを求めるかというものもあります、課題設定から課題解決までどこまでできるか、生徒に対してどのようなサポートができるのか、早めにスケジュールを決める必要があると思います。個人テーマといっても、グループで話し合い、課題を高めていくことも意義があります。様々な手法で突き詰めることができれば良いと思います。

2つ目は、全国的に探究活動が進んでおり、どの学生も主体性やコミュニケーション能力が高まっていると感じています。発表などでアウトプットした後に、キャリア教育につなげ、個人内での振り返りを深めることが大切になってくると思います。今後もできることをサポートしていきたいと思いますので、よろしくお願いします。

● 十勝毎日新聞社（社長室室員）岡田 優人 様

3年間を通して三条高校の取組に関わらせていただき、ありがとうございました。調べたところ、十勝毎日新聞に、年間約240件が帯広三条高校に係る記事が掲載されていることが分かりました。ありがとうございます。1点興味深かったのが、公欠制度を設けた探究活動についてです。他校にこのような事例はあるのでしょうか？

☞（帯広三条高校 合浦校長）公欠で探究活動を後押ししている高校は、知る限りでは把握していません。ただ、本校は、1週間に1単位しか総合的な探究の時間がないため、なかなか外に出て行くことができませんが、学校によっては探究の時間を2単位、3単位と設定している学校も見られます。学校設定科目で探究に関わる授業を設定している学校もあるため、授業の一環として外に出て行く事例は見るができます。

公欠の制度は、CLASSプロジェクトから生まれた前向きな取組だと思います。次年度以降もコンソーシアムが続いていくと伺っており、継続することで三条高校を応援したいと考える人が増えていくと思いますので、地域とのつながりを深めていただければと思います。引き続き協力させていただきます。

● 三条高校地域コーディネーター 長岡 行子 様

地域の方がとても関心を深めてくださっている様子が3年間を通して見えることで、生徒が外に飛び出していく様子があるので嬉しいです。帯広畜産大学や道の駅でのイベントに、ボランティアとして参加するだけでなく、企画を考えたり、意見を出したりするなど、生徒が自ら参画してくれました。先生方も一緒に参加する場面が見られたので、また次年度も関わらせていただければ、今年度以上に生徒と地域が深く関われるようにしていきたいです。よろしくお願いします。

④ 閉会式

●（校長お礼）北海道帯広三条高等学校長 合浦 英則

貴重な御意見をくださりありがとうございました。ここで、急ですが、3年間のCLASSプロジェクトに協力してくださり、本日は運営者として参加している十勝教育局社会教育指導班主査の田尾様に、一言いただければと思います。

☞（十勝教育局社会教育指導班 田尾主査）3年間、CLASSプロジェクトで関わらせていただきました。仮説はあるものの答えのない事業で、帯広三条高校と関わらせていただき感謝しています。校長先生からも話がありましたとおり、北海道教育委員会のホームページで、報告書とリーフレットが示されており、三条高校の活動のポイントが示されています。様々な部分でハードルがあったり、試行錯誤を繰り返したりしたと思いますが、今後も帯広三条高校の探究活動を推進していただきたいと思いますし、コンソーシアム会議のメンバーにも引き続き関わっていただければと思います。

田尾主査ありがとうございました。今後も、持続可能な取組として進めていきたいと思いますので、今後ともよろしく願います。